

*. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その41)】

京都大学瀬戸臨海実験所付近に打ち上がったタコブネ

タコブネは世界の暖海域の表層で浮遊生活するタコの仲間なので海岸への漂着記録はとても少ない。雌が貝殻をつくって船にして外洋に浮かんで流れのまま漂っている。和歌山県沿岸から最近、軟体部がよく残っている新鮮な1個体が報告された。京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”や番所崎には500種余りの大型貝類の貝殻が漂着するが、その中に本種も確かに含まれている。でも、2012年までの約15年間にわたる調査ではたった1個の貝殻の打ち上げであった。その貝殻は色あせ、全体が白くなっており、一部に破損があるものだった。2001年8月20日に番所崎に打ち上がっていたのを発見した。

やっと2個体目の漂着があった。それは新鮮で、色も抜けていなかった。2012年12月5日に“北浜”に打ち上がった。最大殻幅である開口部の張り出し部は、これら新旧の2個は、それぞれ37mmと32mmであった。貝殻上に長短交互にある龍骨部は32本と38本あり、それに対応して形成されているイボは18個と19個ほどみられた。多数あるので2個体ともよく成長しているといえる。

当該調査域へのタコブネの漂着は、オウムガイの貝殻と同じように、漂着前の生態状況は全く異なるが、10年に1回くらいの頻度であろう。これらに対して当域にアオイガイが打ち上がったことはない。たとえアオイガイが外洋の表層に多く生息していたとしても、その殻はたいへん薄くもろいので海岸まで流れ着かないのであろう。



和歌山県
西牟婁郡
白浜町番
所崎（左）
と京都大
学瀬戸臨
海実験所
“北浜”
（右）に漂
着したタ
コブネの
貝殻